2001 Milk Soul Times 78th

DARK

闇に消える

真っ暗だ。一筋の光も無い。闇に包まれている。
何の音もしない。宇宙を漂っているように静かだ。
今私はどこにいるのだろう。こんな風に暗いところはどこにもないはずなのに。
どんなに目をこらしても一筋の光も見えてこない。
暗いだけじゃない。体の自由も利かなくなっている。
手も足も棒のように横たわっているだけだ。
まばたきはできる。首は少し動くけれど、体は1mmも自由には動いてくれない。
･･･少し体が軽くなった気がする。自分のベッドで眠っていたらしい。
よく目を凝らしてみるとうっすらと何かが見えてきた。
どうも変だ。いつもと何か違う。天井がのしかかって来ているみたいだ。
真っ黒な中に何か白くぼんやりと見える。人の顔の様なものが浮き上がっている。
「うわっ！　な、なんだ。あなた！　いつかの悪魔じゃないか！」
眠っているベッドの上に真っ黒なマントを広げて悪魔がのしかかっている。
悪魔は、前にこの部屋を通り道に使いたいと断ってきて、それ以来この部屋をたびたび通りかかっては風を起こしたり、不気味な空気を巻き起こす。
「一体、何の真似ですか！　せっかく人が気持ちよく眠っているのに」
「そう興奮しないでくれたまえ。ほんの冗談じゃないか」
悪魔は真っ黒な衣装に身を包み三角頭巾の奥でにやにや笑っている。
「私が君を起こそうとしたって君はいつだって眠りこけて話にならないじゃないか。私だって、長い付き合いの君を手荒な真似して脅かしたくはないのだよ」
「確かに、ここのところ随分と涼しいんでよく眠ってはいますけどね。だからってね････まあいいですけど、ところで何か御用だったんですか？」
悪魔はひらりとマントを脱ぎ捨てると、気軽な服装で腰掛けた。
「そうやっているところを見ると、どこから見ても悪魔とはわかりませんね」
「ふん。それが我々の狙いなのだよ。今さら旧式の悪魔は流行らないんでね。君くらいだな。そのたびに驚いてくれるのは」
「そんなものですかねぇ」
「そうだ、悪魔に対する認識不足というか、まあ予備知識の欠如だろうな」
「確かに、今の子供達は昔話も絵本も見ないですからね」
「ふむ。我々には受難の時代というわけだ」
「そう、大袈裟に考えなくても･･･ところで何の御用だったのです？」
「いや、今日は何か疲れてしまったからな。
また今度ということにしよう」
「人を起こしといて、それはないでしょう。
　あ！　もしかしてあの約束のことで？」
「うむ。悪魔は約束を守るものだ。君に約束した願いごとの件は気にはなっていたのだけどねぇ」
そう言いながら、悪魔は白い雲に包まれるようにうっすらと消えかかっている。
「そう、そう！　忘れてた。いや今日こそお願いしますよ。ねえ、ちょっと！」
　叫んだ時には、悪魔の姿はすっかり消えて、
　　寝る前に消し忘れた明かりの下に、
　　いつもの見慣れた部屋があるばかりだった。

COLUMN

鎌倉の猫事情　第二十話

グーニー君の花嫁としてはるばる見知らぬ土地へやって来たスィーピーちゃん。小さい頃から一緒に育ったこの2匹は、色々と違う特徴を持っていました。茶系色で耳や顔は真っ黒というシャムの特徴を持つグーニーと違ってスィーピーは色白で灰色の縞模様があちこちに少しずつ入っています。目はパッチリとした薄いブルー。それは可愛らしい猫です。
ところがこの容姿に似合わず性格はなかなか戦闘的です。少し寂しがりやで神経質なグーニーと違って、普段は細かいことにこだわらない性格で、おっとりとして無口なのですが、いざとなると先頭きって敵に立ち向かう勇気を持つ猫です。小さい頃物干し場で2匹をよく遊ばせていました。世間を知らない彼らの興味は電線や屋根の上で羽を休める鳩やカラスなどの鳥です。2匹で愛らしく植木の葉っぱにじゃれあっていたかと思うと、スィーピーの目がらんらんと輝き口元を膨らませ、髭をピンと広げておかしな声を出しています。一心に見つめる方向には鳩が電線にとまりこちらの方は気にもかける様子はありません。スィーピーは小さな頭を下げお尻を震わせながらじりじりと敵に迫って行こうとしています。少し後ろの方で、事態に気づいたグーニー君が同じように目を輝かせ、髭を立たせて見つめます。が、よく見るとグーニー君の方は少しずつ後ろへと下がって行ってます。そうしている間にスィーピーちゃんの方は物干し場の手すりまで進んでいっています。今にも落っこちそうになったところで助けに行くのですが、その頃グーニー君、すっかり前足をたたんで落ち着いています。
スィーピーちゃんの獲物に対する秘められた闘争本能は物干し場で確実に育っていったようです。
グーニー君は、どうなんでしょう。まあぼちぼち大人の猫へと成長していきました。
しかしグーニー君にも良い点はあります。トイレの砂場の管理は自分の役目と心得ているようです。用を済ませた後は念入りに砂をかけ、何か変化はないか周りを点検することも忘れません。･･･スィーピーちゃんの方はと言えば、用を足しても、大きなのを残したままさっさと立ち去ってしまいます。
それを見守るグーニー君、スィーピーちゃんの残したあともせっせと砂をかけてあげます。トイレばかりではありません。ご飯は必ずスィーピーちゃんに先に食べさせます。最初の頃は2匹並んで食べていましたが、スィーピーちゃんの食欲が盛んになってくると、グーニー君はそっと後ろに下がってそれを見守り、スィーピーがすっかり満足して立ち去ると、残ったご飯を食べ始めます。
グーニーのスィーピーに対する優しい心根だけはその後もずっと変わることはありませんでした。
　そして、いよいよこの仲良し夫婦に待望の子猫たちが誕生することになるのです。

to be continued